

地域で最期まで暮らし続けけるための住まい

高齢者人口の増加に備え、港区では高齢者が地域で暮らし続けていくことができるための多様な高齢者住宅の確保をすすめています。

六本木ヒルズの向かい、六本木駅から徒歩1分という好立地に9月にオープンしたばかりのサービス付き



建物全景

高齢者向け住宅の開所式に招かれました。区営住宅シティハイツ六本木をシティハイツ六本木等複合施設として建て替え、サービス付き高齢者向け住宅、訪問看護事業所、訪問介護事業所、障害者グループホームを併設し、運営は民間に運営委託しています。

木をふんだんに使った明るいロビーを入ると、フロアを分けて1・2階が知的障害者のグループホーム、3～5階が高齢者の住まいとしています。各フロアは回廊式の構造となっており、中心に明かり取りの窓があるので

全体に明るく、ゆったりとした雰囲気です。サービス付き高齢者向け住宅は単身者用の30戸の住まいで、各室に簡単なキッチンとトイレがあります。玄関に折り畳み式の椅子を作りつけてあり、ちょっと腰かけて靴を履きかえることができるようになっており、使いやすそうです。

住宅の入り口には相談室があり、スタッフが常駐して緊急通報や定期的な安否確認、



居室

入居者からの相談に対応します。厨房は地下にあり、希望に応じて食事が提供されます。入居はこれからで、東京タワーの見える方の部屋から入居者が決まりは始めているそうです。

最期まで地域で暮らしたい。そのためには少し先を見通して、地域に多様な住宅を用意していくことの大切さを実感しました。(松浦)

ひと・まち社の活動へのご支援をお願いします

ひと・まち社の主な事業は、特養やグループホーム、保育園などの東京都福祉サービスの第三者評価と福祉にかかわる調査研究活動です。第三者評価では年間30件を受託目標とし、現在19件の契約を見込んでいます。また、児童養護施設のプロポーザルに応募するなど、新規受託にも意欲的に取り組んでいます。

調査研究活動では、介護保険制度改正に伴い3年間の継続調査「介護予防・日常生活支援総合事業に関する自治体調査」を実施中で、今年は3回目の調査を行います。介護予防・日常生活支援総合事業には「地域づくり」が盛り込まれ、市民活動の活躍が期待されていますが、市民の活動こそ主体的に作り出されることが理想です。「地域の福祉づくりは市民の手で」を意識し、地域活動をつくり出すことや市民提案につながるよう、調査を進めていきたいと思えます。

ひと・まち社の調査活動は、会費や賛助会費、寄付などにより支えられています。皆様には引き続き

き、調査活動を支えていただきますよう、ご支援ご協力をお願い申し上げます。

認定NPOは、大勢の市民の支援を受けていることを示すために、毎年、3,000円以上の寄付者が100人以上いることが絶対基準となります。今年度の絶対基準の達成まで、もう少し大勢の皆様のご支援が必要です。ひと・まち社への寄付は、公益社団・財団法人、学校法人、社会福祉法人などへの寄附と同様に税制優遇が受けられ、寄付した金額を確定申告すれば税金の優遇(還付)が受けられます。ぜひとも皆様のご協力をお願い申し上げます。(工藤)

ひと・まち社への寄付はこちらへお願いいたします
郵便振替口座 00170-6-410791
NPO 法人市民シンクタンクひとまち社
三菱東京UFJ銀行 新宿中央支店 普通 5298170
特定非営利活動法人市民シンクタンクひとまち社

編集後記：友人のお手伝いで、一人暮らしのおばさまの遺品を整理しに行った。他人の私が手を出せるのは、出された洋服の仕分けと細々とした小物類。思い出を語りながらの仕分け作業は、残されたものが故人を偲ぶよい機会となっていたことに気がついた。一人では抱えきれない寂しさややるせなさ。人は、人が発する言葉で癒されることを身を持って感じた。誰かと話せる「居場所」が身近な地域にあるといい。(K)

特定非営利活動法人 市民シンクタンクひと・まち社



Contents

P2 「一軒の空き家が生んだ地域のつながり」
～文京区の事例から～
P4 地域で最期まで暮らし続けるための住まい

No.59

2017年9月20日発行(季刊)

特定非営利活動法人 市民シンクタンクひと・まち社
〒160-0021 新宿区歌舞伎町2-19-13 A S Kビル601
TEL 03-3204-4342 FAX 03-6457-6202
E-mail npo@hitomachi.org URL : http://www.hitomachi.org
郵便振替口座 00170-6-410791 市民シンクタンクひと・まち社

旧満州への旅をして その1～幼い日の記憶をたどる旅～

市民シンクタンクひと・まち社理事 木下伸子

プロローグ

私は、旧満州帝国(現中国東北地区)で生まれ4歳まで、その首都新京(現長春市)で育った。1945年の日本の敗戦で、翌年4歳の時、母と妹と3人で日本に引き揚げてきた。引き揚げに至るまでもいろいろ大変だったが、引揚げてくる道のりは、子ども心にも過酷なものだった。新京から無蓋貨車に乗り命がけで、錦州の葫蘆島(ころとう)まで行き、そこから引き揚げ船に乗り佐世保港に上陸、埼玉の父の実家までたどり着くのに41日かかったそうだ。列車で覚えている風景は、田圃だったのか原っぱだったのか、一面の緑。葫蘆島では収容所で迎える船が着くのを何日か待ち、いよいよ乗船できるという日は船着場まで、延々と歩いた。大きな手製のリュックを背負い、特大のト

ランクを提げ、一方の腕に妹を抱えた母に、迷子にならないようにと、晒でトランクにつながれ「落伍したら死ぬのよ」と言われ続けて、ベソをかきながら必至で歩いた。自分のものを入れたリュックを背負い、両肩にたすき掛けにした雑嚢と1升(1.8ℓ)入りの水筒が重かった。そんな光景は覚えているが実際の距離や時間・日数などははっきりとはわからない。育った街を見、無蓋車で見た景色、葫蘆島の港はどうなっているのか、体験を誰かに伝えるためにも、確かめに行きたいというのが私の長年の願いになった。少しずつ年齢を感じはじめ、行きたい思いは年々強まった。70年以上も経ったら当時の様子は残っているはずもないが…行きたい、やっぱり行こう!

☆ようやく実現

昨年、ついに思い切って、中国の旅を専門に扱っている旅行会社にプランニングしてもらった。しかし現地ガイドを頼んでも、さすがに一人で行く勇気はなく、同行者を募ったが、申し出てくれる人はいなかった。ぐずぐずしているうちに年が明け、今年になって地元日中友好協会のメンバーになったMさんが一緒に行ってくれることになった。さらに出発近くなって、やはり協会メンバーで、長年市内で活躍している天津出身のYさん・Cさんの中国人夫妻が里帰りに合わせて現地で合流することを申し出てくれた。

6月11日(土) 14:00成田発の中華国際航空機で、予定より30分遅れで、16:20大連空港着。ついに私の引き揚げ追体験の旅が始まった。

荷物を引き取り、出口から出るとガイドのK氏が待っており、長春行きの高速列車に乗る大連北駅に車で向かった。M氏は大連の旅行会社の職員、50歳代の男性、いかにも中国人という風貌で、とてもフレンドリーな人柄だった。



19:00 大連北駅発長春行きの列車で3時間余りの旅。既に日は暮れており、時速300kmを

超えて走る列車の車窓からは沿線の風景は見えない。車内はほぼ満員。外国人らしい乗客は見当たらない。K氏は季節の果物だと言って生のライチとサクランボを持ってきてくれ、冷凍しか知らない生のライチは珍しく彼のおもてなしは嬉しかった。明日からの日程などを確認しているうちに22:30長春駅に着いた。



(続きは次号)